



高等学校日语教材

李光泽 卜庆霞 编著

日本文学史



大连理工大学出版社

H369.4/123

2007

高等学校日语教材

日本文学史

李光泽 卜庆霞 编著

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本文学史 / 李光泽, 卜庆霞编著. —大连: 大连理工大学出版社, 2007. 7
(高等学校日语教材)
ISBN 978-7-5611-3635-5

I. 日… II. ①李…②卜… III. 文学史—日本—高等学校—教材 IV. I313.09

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 094851 号

大连理工大学出版社出版

地址: 大连市软件园路 80 号 邮政编码: 116023

发行: 0411-84708842 邮购: 0411-84703636 传真: 0411-84701466

E-mail: dutp@dutp.cn URL: <http://www.dutp.cn>

大连金华光彩色印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸: 140mm × 203mm 印张: 5.75 字数: 143 千字
印数: 1 ~ 3000

2007 年 7 月第 1 版

2007 年 7 月第 1 次印刷

责任编辑: 宋锦绣

责任校对: 张 凡

封面设计: 苏儒光

ISBN 978-7-5611-3635-5

定 价: 15.00 元

序 言

日本文学具有一千多年的历史，是世界文学宝库的重要组成部分。日本民族在吸收其他民族文化的基础上，创造了具有日本民族特色的日本文化。众所周知，中日两国间的文化交流具有悠久的历史，中国文化对日本文化的形成和发展具有深远的影响。例如，日本在古代后期借用中国汉字的偏旁部首，创造了假名文字，从而使日本古代文学达到了高峰。近年来中日两国间的交往更加频繁，因此，作为日语专业的学生，了解和掌握日本文化是至关重要的。

由于时间所限，各个知识点不能一一详述。为使学生重点掌握各个时代的文学特点和具有代表性的文学作品，决定共分五个年代进行编写，即：古代前期、古代后期、中世、近世、近代，而且采用了“点面结合，重点带一般”的手法。例如，古代前期以《古事记》、《日本书纪》、《万叶集》为重点，对其他作品只做了一般性介绍；古代后期以《源氏物语》和《枕草子》为重点，对《竹取物语》等作品只做一般性介绍；中世文学则以《方丈记》、《徒然草》、《平家物语》为重点，对其他只做简单介绍；近世文学对井原西鹤的小说《浮世草子》、松尾芭蕉的代表作品《奥之细道》、近松门左





卫门的《净琉璃》做了重点介绍，其他做了一般性介绍；近代文学以明治、大正时期的文学为重点，并且突出各个文学流派的代表作家及作品。为了使学​​生便于消化吸收，在每一单元课后都编排了配套练习，并编写了一套综合自测题。

书中对难读的词语标注了读音。

由于时间和水平有限，书中错误在所难免，希望同行及广大读者不吝赐教。

李光泽 卜庆霞

2007 年春

目 次

第一章 古代前期の文学（奈良時代）

第一節 古代前期の文学概観……………	1
第二節 主な文学作品……………	3
1 記紀文学——「古事記」と「日本書紀」……………	3
2 「風土記」……………	4
3 「懷風藻」……………	5
4 「万葉集」……………	5
5 「歌經標式」……………	9
第一章練習問題……………	10

第二章 古代後期の文学（平安時代）

第一節 古代後期の文学概観……………	13
第二節 主な文学作品……………	15
1 「古今和歌集」……………	15
2 「竹取物語」……………	16
3 「伊勢物語」……………	18
4 「堤中納言物語」……………	18
5 「源氏物語」……………	20
6 「栄花物語」……………	24
7 「大鏡」……………	24





8 「今昔物語集」	25
9 紀貫之と「土佐日記」	26
10 「蜻蛉日記」	26
11 「和泉式部日記」	27
12 「紫式部日記」	27
13 「更級日記」	27
14 清少納言と「枕草子」	28
15 「日本霊異記」	30
16 「千載集」	30
17 「梁塵秘抄」	30
第二章練習問題	31

第三章 中世の文学（鎌倉、室町時代）

第一節 中世の文学概観	33
第二節 主な文学流派	35
一、公家貴族の文学	35
1 「新古今和歌集」	35
2 「百人一首」	36
3 「連歌」	36
4 「金槐和歌集」	37
二、草庵の文学	37
1 鴨長明と「方丈記」	38
2 兼好法師と「徒然草」	39
三、武士、庶民の文学	41
1 軍記物語	41

2 御伽草子	43
3 「宇治拾遺物語」	44
4 能	44
5 狂言	44
6 小歌	45
第三章練習問題	47

第四章 近世の文学（江戸時代）

第一節 近世の文学概観	51
第二節 近世の小説	54
一、井原西鶴と浮世草子	55
二、読本	59
三、洒落本、人情本、滑稽本	62
四、草双紙	63
第三節 詩歌	63
一、俳諧	63
二、狂歌と川柳	68
三、国学の興起と繁盛	69
四、漢学と漢詩文	70
第四節 劇文学	70
一、近松門左衛門と浄瑠璃	70
二、歌舞伎	72
第四章練習問題	74

第五章 近代の文学

第一節 近代の文学概観	78
-------------	----





第二節 主な作家及び作品	83
一、近代の文学流派及び代表作家.....	83
(一) 写実主義	83
(二) 擬古典主義	85
(三) ロマン主義	88
(四) 自然主義	93
(五) 耽美派	97
(六) 白樺派	99
(七) 新思潮派	103
(八) 夏目漱石と森鷗外	107
(九) 新感覚派	113
二、詩歌.....	118
三、昭和の小説と評論.....	126
四、戦後の文学.....	132
五、昭和三十年代の文学.....	140
六、昭和四十年代の文学.....	144
七、昭和五十年代以後の文学.....	145
第五章練習問題.....	147
総合模擬テスト.....	151
参考答案.....	157
附录：日本文学史年表.....	163
参考書目	174

第一章 古代前期の文学 (奈良時代)

第一節 古代前期の文学概観

一、文学背景

1. 古代前期

おおかた五世紀ごろから八世紀まで、すなわち文学の発生から794年の平安遷都までの間を指す。日本史で古代前期とは大和、飛鳥、奈良時代とも呼ぶ。その中でも、奈良時代を中心としている。この時期を上代とも言う。

2. 国家の成立

紀元前3世紀に、集団による農耕生活が始まり、各地でだんだん小国家が出てきた。4世紀に、大和朝廷が統一国家成立を成し遂げた。

3. 律令制の確立

7世紀に、聖徳太子の改革によって、「憲法17条」が定められた。和を尊び、仏教を信じ、天皇に服従すべきことなどを強調して、すべてが国家の統治に有利である。しかも、これまでの大王の称にかわって、天皇の称号が用いられるようになった。

4. 遣隋使と遣唐使

7世紀から遣隋使と遣唐使が大陸に頻繁に派遣されて、





中日両国の交流がとても盛んである。聖徳太子の時、小野妹^{おののいも}子^こが何度も隋^{ずい}に派遣された。奈良朝に入ってから、朝廷がさらに頻繁に遣唐使や留学生を中国に派遣して、日本はどんどん中国大陆から中国文化を吸収した。また、日本の留学生も帰国するに際して、唐から大量の書籍を持って帰る。だから、奈良文化の特徴と言え、貴族的文化、^{とうふう}「唐風」であると言えよう。

二、口承^{こうしやう}文学の時代から記載^{きさい}文学時代へ

ずっと昔、日本の祖先は祭りを通して、共同体を結んでいった。その当時、文字がなくて、祭りの場で、神々や祖先に対して語られ歌われる神聖な言葉は、口々相伝えるより仕方がなく、長い間、子々孫々に言い継ぎ、歌い継いで、伝承されていった。このように誕生した^{しんわ}神話、^{でんせつ}伝説、^{かよう}歌謡、^{のりと}祝詞などを口承文学と言う。

大和朝廷は国家を統一すると、朝鮮^{ちやうせん}、中国との交流が盛んになった。4世紀ごろに、大陸から漢字が伝わってきた。そして、だんだん実用化され、6世紀ごろに、漢字で表記できるようになり、文学作品も漢字によって、記載されるようになった。これは記載文学の始まりである。

祝詞：古代人は言霊信仰によって、神への祈りの言葉を祝詞と言う。その中には、神事の時群臣に読み聞かせるものとか、祭りの儀式の時に神に祈願するものとか、天皇に上奏して御代の長久を祈るものなどがある。現存

するのは「延喜式」の27編、「台記」の別記に収められた「中臣寿詞」の一編を合わせて、計28編である。

宣命：宣命というのは、天皇の詔を臣下に伝える和文体の詞章である。漢文体を詔勅と言うが、純粹の和文体で書かれたのを「宣命書き」と言う。「続日本紀」の62編は現存する宣命である。

第二節 主な文学作品

1. 記紀文学——「古事記」と「日本書紀」

(1) 「古事記」

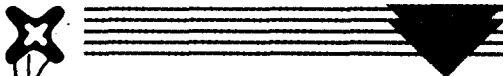
712年に、太安万侶によって編集されたと言うことである。上、中、下の3巻からなっている。日本語で書かれ、前代の伝説、民衆の生活も含み、そこから古代日本人の考え方や個人感情などを理解することができる。文学性がかかなり高い。今まで保存している日本最古の書籍である。

しかし、「古事記」は最高権利者である天皇や皇室などが人民を支配することを目的としているのである。

天地初めてひらけし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。この三柱の神は、みな独神と成りまして身を隠したまひき。

——「古事記」





(2)「日本書紀」

720年に^{とねり しんのう}舎人親王などが編集したものである。これは漢文体で書いた30巻よりなる歴史書の形をしたものである。中国の史書にならって、漢文の^{へんねんたい}編年体で書かれたものである。天皇の君主としての地位を正当化する目的で、全体の構想が創作されている。

「古事記」と「日本書紀」は日本文学史の中で、最初の整った本の形であろう。記紀文学は人民大衆の文学ではなく、国家最高権利者である天皇、貴族の文学である。しかし、その中から、当時の地方民衆の生活状況や宗教などが分かり、民俗研究の貴重な資料として、かなり大きな価値がある。

また、「古事記」、「日本書紀」には、“まこと”という文学意識が芽生えていた。しかし、それは個人或いは人民大衆の思想感情の表れではなく、大和民族固有の信仰、即ち神への^{すうはい}崇拜という原始的な信仰をもとに生まれたのである。言い換えれば、この文学意識は写実の文学意識の芽生えともいえるよう。

2.「^{ふ ど き}風土記」

713年、朝廷が諸国に命じて、その国の地理、産物、伝説などを記させた。日本の最初の^{ちし}地誌である。現在5つがまとまった形で残っている。当時の地方の暮らしを知る手がかりとしても重要である。

3. 「懷風藻」^{かいふうそう}

中国大陆文化の強い影響で、日本でもずっと昔から日本人の手によって、数多くの漢詩文がどんどん作られていた。殊に天智天皇が漢詩文を奨励するゆえに、漢詩文の知識や創作が盛んになりつつある。その当時、漢詩の習得こそが官人としての欠かない教養であった。奈良時代には、たくさんの漢詩集が出てきたが、現存しているのは「懷風藻」だけである。

「懷風藻」は751年に、編纂された。編者は淡海三船^{おうみの みふね}と言われていたが、定説はない。作者はほとんど当時の貴族階級であった。日本の最古の漢詩集として後世によく知られている。その中には、64人の詩120編が収められ、中国六朝^{りくちよう}の古体詩をまねた作品が多い。詩形は五言^{ごごん}を主として、七言^{しちごん}の詩は七首に過ぎない。作品の中には、中国の儒教^{じゆきよう}の思想が明らかに含まれている。殊に「論語」の中の言葉が大量に引用されていた。そうして、中国の伝統的な文化は日本文学に深い影響を与えたと言っても過言ではない。また、この詩集は「万葉集」の編纂にも深い影響をもたらした。

4. 「万葉集」^{まんようしゅう}

日本最古の歌集であり、その中に収めている歌は約4500首、紀元340年から奈良末期の759年までの間に作られているものである。450年の長時間にわたっている。大伴^{おおとも}家持^{やかもち}によって編纂されたものだと言われている。

内容から見ると、雑歌^{ぞうか}、相聞歌^{さうもんか}、挽歌^{ばんか}、比喻歌^{ひゆか}、東歌^{あづまた}、



さきもちうた
 防人歌などがある。その中には、相聞歌は人間同士の贈答の歌、特に恋愛の歌が多い。挽歌は死者を悼む^{いた}歌である。雑歌はそれ以外の歌や宴席の歌などいろいろなものがある。東歌は東国の一般庶民^{あづまこく}の生活から生まれた民謡的な歌であり、防人歌は東国から九州防備のために、派遣された兵士や家族の歌である。また、形式から見ると、長歌^{ちようか}、短歌^{たんか}、旋頭歌^{せどうか}などがある。本文は全て漢字でもって日本語を書いたものである。これを万葉仮名^{まんようが}と言う。その以来、日本語の表記があった。「万葉集」は一般的に、四期に分けられている。

万葉一期（発生期）^{じよめいてんのう} 舒明天皇（629年）の時代から壬申^{じんしん}の乱^{らん}（672年）前後までの間を指す。歌は集団的な生活背景から、個性的な叙情歌^{じょじやうた}へ変わっていった。特徴としては、感動を直接に表現した素朴な風格である。皇室歌人が圧倒的^{こうしつかじん}が多いが、その中には、額田王^{ぬかたのおおきみ}がその中の代表的な歌人である。

大和には 群山^{むらやま}あれど とりよろふ 天の香具山^{かぐやま} 登り
 たち^{くにみ} 国見をすれば^{くにはら} 国原は 煙たちたつ^{うなばら} 海原は^{かもめ} 鳴たち
 たつ うまし国ぞ あきつしま 大和の国は

——舒明天皇・巻一

万葉二期（発展期）^{てんむ} 天武、^{じどう} 持統、^{もんむ} 文武の三代にわたる
^{ふじわら} 藤原時代から^{へいじやうきやうせん} 平城京遷都までの約40年。^{りつりやう} 律令国家が発展して、皇室も繁栄になってきた。歌の思想内容や表現手法がこの前より複雑になった。その中には、長歌が大いに発展した。

特に、柿^{かき}本人^{もの}麻呂^{のひと まろ}は万葉中最高の歌人と見られ、長歌、短歌など、後世にたくさんの優れた作品を残してくれた。彼の手によって長歌が完成された。そして、彼は典型的な宮廷詩人で、山部^{やまべ}赤人^{のあかひと}とともに後世に「歌聖」^{かせい}と称されている。

彼の歌は、構想が雄大で、技巧の運用に長じるが、ほとんどその当時の大和朝廷や皇室貴族を賛美するものである。

あわじ　のじま　さき　はまかぜ　いも　ひも
淡路の　野島が崎の　浜風に　妹が結びし　紐吹きかへす
——柿本人麻呂

万葉三期（最盛期）　平城京遷都（710年）から天平5年（733年）までの約20年間。この時期は万葉集の最盛期であるから、多くの知識人が出てきた。そして、個性豊かな作品がたくさん作られた。その中に代表的な歌人として、山上^{やまのうえ}憶良^{のおくら}、大伴旅人^{おおとも}、山部赤人^{のあかひと}などがいる。特に山上憶良は地位があまり高くないが、彼の歌は内容上に優れたところがあり、子を思う歌や貧窮問答^{ひんきょうもんたう}の歌などが、人間味があって、われわれには心から親しい感じが湧いてくるわけである。だから、彼は後世に「思想歌人」と評されている。

この時期の歌は繊細で洗練されているが、一期の素朴さは失われてしまった。

富人の　家の子供の　着る身なみ　くたし棄つらむ　絹

綿らはも

——山上憶良

あしひきの 山の^{しづ}雲に 妹待つと 吾^{われ}立ちぬれぬ 山の
雲に

——大津皇子（おおつのみこ）

万葉四期（衰退期）^{てんびょう}天平6年から759年までの20年間。
万葉集時代が終わりを告げ、衰退に歩みつつある。歌は次第
に固有の力強さを失って、^{りちてき}理知的、^{かんしょうてき}感傷的となり、^{せんさいゆうび}繊細優美
な情趣を尊ぶようになった。代表的な歌人は^{おおとものやもち}大伴家持である。
彼が759年に「万葉集」の編纂を完成したので、「万葉集」
の^{しゅうたいせいしや}集大成者とも言えよう。

要するに、「万葉集」は日本古代における一つの偉大な作
品として、芸術的にも、思想的にも、優れたところがある。
また、われわれはこの作品を通して、日本古代の文化思想、
社会風俗、人間関係、両性関係、それに、古代の農民生活、
兵役関係などの面影を見ることもできる。さらに、外来文化
摂取の旺盛な意欲と伝統的文化の強い生命力との作用が均衡
になっており、古代国家上昇期の社会現実が生き生きと描か
れている。

「万葉集」にも、「まこと」という文学意識が表れていたが、
「古事記」と「日本書紀」の「まこと」とは違い、個人が現
実生活への体験をもとに生まれた個人的な真な情感である。